



広島研修



想像を絶する原爆被害

かさい しょうり
弥富北中学校 葛西 勝琳

【展示品が語る戦争の恐ろしさ】

資料館で見た絵や写真は、目を背けたくなるほどつらいものでした。しかし、現実から目をそらしてはいけないと思い、しっかりと目に焼き付けようと努めました。特に印象に残っているのは、焼けただれた肌をした赤ん坊の写真です。これらの写真や資料に触れることで、原爆に対する考えが根本から変わりました。

また、原爆ドームの姿にも大きな衝撃を受けました。原爆ドームは、戦争が生み出した負の遺産であると同時に、戦争の恐ろしさを今に伝える、なくてはならない存在だと思いました。先の見えない戦争の時代の中で、人々の生活や希望を支える場所として使われていました。そのような市民の希望であった建物と多くの人々の命を一瞬で奪ってしまった原爆の恐ろしさが、原爆ドームから強く伝わってきました。この悲劇を決して繰り返してはならないと心から感じました。

【被爆ピアノの音色が奏でる】

私たちは、研修の中で被爆ピアノの演奏を聴きました。当時、被爆したピアノにはガラスや建物の破片が刺さったままの状態であり、そこから演奏できる状態にまで修理されました。その話から、被爆ピアノの演奏を通して後世に伝えたい、そして世界中にその音色を響かせたいという強い信念を感じました。被爆ピアノの音色は、普通のピアノと似ていながらも少し違い、どこか寂しさを感じさせるものでした。その音色には、原爆で亡くなった兵士や市民の「生きたい」という思いが込められているように思いました。被爆ピアノコンサートを通して、戦争で犠牲になった方々の分まで精一杯生き、これからの未来が少しでも明るくなるよう行動していきたいと思いました。



平和と真剣に向き合って

たにぐち そうま
弥富北中学校 谷口 蒼真

【資料館の展示と原爆の被害】

1945年8月6日、アメリカ軍が投下した原子爆弾が、広島市街地上空で炸裂しました。爆発後には爆風によるやけどや、倒壊した建物の下敷きになるなどして、多くの人々が命を落としました。資料館には、このような原爆の被害を今に伝える多くの展示がありました。特に印象に残っているのは、紫斑が現れた兵士の写真です。紫斑とは、原爆の放射線によって皮下出血が起こり、斑点状にあざができる症状のことです。その他にも、子どもに関する遺品など、見ていて悲しい気持ちになる展示が数多くありました。展示物から伝わってくる苦しさや、亡くなった人々の無念さに、胸が締め付けられる思いでした。

【平和記念公園の見学を通して】

ボランティアガイドさんに付いていただきながら平和記念公園を見学しました。公園内には、池など水に関するものが多くありました。原爆が投下された後、水を求めながら亡くなった人が多くいたことに由来しているそうです。他にも、原爆の子の像や、原爆投下後も生き抜いたアオギリの木などを見学しました。私にとって最も印象に残ったのは原爆ドームです。被爆当時のがれきがそのままドーム内に残されており、遠くから見たとき以上に、悲しさや寂しさが深く伝わってきました。また、核武装が進む現代の世界に向けて、静かに警告を発しているような、凜とした姿にも感じられました。私たちは平和な時代に生まれたからこそ、平和を守り、次の世代へ伝えていく使命があるのだと強く感じました。

